

氏名(本籍)	ふくちあきこ 福地明子(東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1588号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	ワーズワスの『隠遁者』『内なる楽園』への道
主査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 井上修一
副査	筑波大学教授 博士(文学) 大熊昭信
副査	筑波大学教授 文学博士 川那部保明
副査	筑波大学教授 森田孟

論文の内容の要旨

本論文は、イギリス・ロマン派の代表的詩人ウィリアム・ワーズワスの未完に終わった『隠遁者』を対象とし、書かれることがなかった部分を含めて、作品の全体像を解明しようとしたものである。この作品は、人間・自然・社会を歌う三部作として構想され、実際に書かれた作品は、第一部第1巻『グラスミアの家』、第二部『逍遙』、そして4篇の断片詩のみである。しかし著者は、『隠遁者』が17世紀の大詩人ミルトンの『楽園の喪失』にある「内なる楽園」を追求した作品であると解釈し、その上で、その楽園が自然の中で知る One Life の楽園から、キリスト教の神の楽園へと向かう流れをもつため、結果として、詩人自身が『隠遁者』の予備的作品とした『序曲』が『隠遁者』の第一部、『逍遙』が第二部、『グラスミアの家』が第三部に相当する可能性があるとする新説を展開している。

本論文の構成は、次のとおり：

はしがき／Abbreviations

序

第一章 『隠遁者』の誕生

第二章 『グラスミアの家』における楽園

第三章 「内なる楽園」とその盛衰

第四章 ワーズワスの転向：『グラスミアの家』から『逍遙』へ

第五章 『逍遙』——「楽園」への長い逍遙

結語：「内なる楽園」三部作への道

参考文献／索引

第一章では、『隠遁者』の発想の経緯とその構想が考察され、<『逍遙』序文における「趣意文」の意味><『隠遁者』の誕生><1,300行の意味><『廃屋』から『グラスミアの家』へ：「前文」の意味>が扱われている。

第二章では、<『シカ跳びの泉』から『グラスミアの家』へ><『グラスミアの家』における楽園性><『序曲』執筆の事情 (I) ><『序曲』執筆の事情 (II)：稿本J及び「二部序曲」の意味>が扱われ、『グラスミアの

家』の書かれた経過、そしてそこにかかわる「楽園」の概念の変化が論じられている。

第三章では、＜ワーズワスにおけるプロティヌスと「内なる楽園」＞＜「孤独」とその盛衰＞＜One Life 以前の詩『辺境の人々』におけるOne Life＞＜『リルスタンの白雌鹿』：One Life 終結の詩＞が扱われ、ワーズワスの追求の課題であった「内なる楽園」がどのように変化していくかが考察されている。

第四章では、＜『義務に寄せる頌歌』にみられる転向＞＜「楽園」模索の旅（I）：『隠遁者』「1808年断片」考＞＜「楽園」模索の旅（II）：『隠遁者』「1826年断片」考＞が扱われ、『グラスミアの家』から『逍遙』へいたる過程で、どのように詩人の「楽園」が、想像力による楽園回復願望から神の楽園への願望へと変化したか、多様なテキストが引き合いにだされ追求されている。

第五章では、＜『逍遙』概観＞＜「行商人」から「さすらう人」へ：『廃屋』から『逍遙』第1巻へ＞＜「孤独の人」＞＜第4巻における失意の修正＞＜牧師とその語る話＞＜最終巻における楽園＞が扱われ、『逍遙』の綿密な分析が行われ、詩人が目指すようになったキリスト教的「楽園」へいたる長い模索の旅が、この作品であるとされている。

結語では、『隠遁者』の第三部が書かれなかった理由が推測され、詩人ワーズワスの観念上の動揺のほか、彼の詩人としての資質が最大の原因であるとされている。つまり、観念によるのではなく、みずからの体験にもとづき創作する彼の資質である。そして、第三部が完成していれば、想像力によって達成されたとしたOne Lifeの「楽園」から、キリスト教の信仰によって獲得される「楽園」への、壮大な「楽園回復」が完成することになったろうという。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、約27年かけて著者が追求してきたワーズワス研究の集大成である。この追求がこの形で結実するにいたった契機は、1997年に、海外の研究者向けに日本で出版されている雑誌 *Poetica* 47号に掲載された論文“Wordsworth's *The Recluse* : A Poem of Growth toward His' Paradise Within”であった。ここで展開された論が核となり、これまで書きためられてきた論文が修正・加筆され、さらに第5章があらたに書かれた。地道に追求してきた研究が、一つの契機でいっきにまとまった様相を呈している。地道な追求のあとの大胆な展開がみられるからだ。その大胆な展開とは、書かれることのなかった作品が問題化され、詩人の構想が実現したとすれば、当然、かなくなったことであろうという推断がなされていることである。この推断は推断にはちがいないが、著者の長年にわたる研究によって裏打ちされており、また先行研究が十分に検討され、詩人ワーズワスの資質が的確にとらえているので、十分な説得力をもっている。

従来、英米文学研究では、書かれて出版されたすぐれたキヤノンの作品だけが研究対象となってきた。作品とはそういうものだと考えられたからである。これは、いわゆる新批評の影響であった。おそらく、本論文の論の展開は、この批評理論の枠からは不可能であったろう。そもそも新批評は、ロマン派の詩を不当にも評価しなかった。したがって、ロマン派の詩の研究は、新批評の枠組とは異質の枠組みで行わなくてはならない。著者が述べているように、ワーズワスの資質は、みずからの体験にもとづいて創作することであったから、新批評とは相容れないものである。著者は理論家ではないので、この点を入念に論じて自己正当化することはないが、果敢に提出した仮説は、こうした観点からしてもとても魅力的であり、また新しい理論的契機を提供しており、詩作品についての見方の変更を迫る論文となっている。

著者自身が示していることであるが、ワーズワスは生涯かけて作品に訂正を加えた。あるいは、作品が変容していくともいえる。つまり、彼の生そのものが作品となるのだ。とはいえ、彼の死をもって、作品は完結しない。常に未完でありつづける。だから、著者自身が提案した『隠遁者』の作品像も、また未完であろう。こうした理論的見解が、著者の創りだしたテキストから読みとれるのである。著者の意図しなかった効果である。

本論文はとても読みやすく、論旨が明快であり、長期にわたる学識が十分に感得できる好論文であると評価できる。ただ、書かれなかった作品が研究対象となったことを問題にした審査委員もいたので、この点はやはり、しっかりと正当化すべきであった。とはいえ、『隠遁者』の仮定的全体像をめぐる新説を提供したことは、学界に寄与するところ大と認められる。よって、本論文は学位論文として十分に価値あるものと判断する。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。